

二〇二四年三月二十九日

みつまたの匂ふ裏山黄に染めて
一門の諸子うち揃ひ花下に笑む
紙垂のごとやぐらに垂るる鶯青葉
掘り返す土柔らかき穀雨かな
前撮りの花嫁さんが芽木越しに
啓蟄の雨にやぐらの土匂ふ
若草の飛び出してをる四つ目垣
切先を立てて出でたる物の芽かな
雨晴れてきたと囀りはじめけり
春の日を弾く広葉樹林かな
近寄れば柵に顔出す牛のどか
春泥の道に敷かれし歩板かな
うち仰ぐ磴はむなつき新樹光
蒼天の梢のたかきより初音
春光にぎよる目見開く仁王かな
胴からも芽吹く大樹の桜かな
やぐらからつぎのやぐらへしじみ蝶
虚子やぐらへと通ひくる若葉風
丹の欄に記念写真や古都うらら

二〇二四年三月二十七日

小物店ジプシーしつづ路地うらら
白無垢の渡る堂縁風光る
一門の墓春陰に横列す
竹林の風に押さるる遍路道
春天を貫くごとく飛行雲
古都うらら和服姿に彼彼女
花終へし水仙は葉を三つ編みに

二〇二四年三月二十六日

一穢なき空にあえかや初桜
丹精の庭に春愁癒やしけり

やよい 康子
みきお 康子
かえる 康子
かえる 康子
ぼんこ 康子
せいじ 澄子
澄子 澄子
やよい 千鶴
千鶴 康子
澄子 澄子
かえる かえる
かえる 康子
むべ 康子
むべ 康子
むべ 康子

かえる 康子

ご朱印に猫の絵もあり遍路寺
山門を額縁として寺若葉
急磴のなぞへを綴る落椿
老いの息整へて跳ぶ春の泥

二〇二四年三月二十五日

竹秋の細道抜けてやぐらへと
水平線 曖昧 模糊と 春霞
春昼や杖忘れある孔雀小屋
何の樹ぞ怒髪のごとく芽吹きをり
山門へいざなふごとく若葉影
海坂へ道真直ぐや風光る

二〇二四年三月二十四日

ちりちりと古傷痛む余寒かな
野の花も手向けられをる彼岸かな
ぜんまいの赤子の拳めきにけり
蔦青むやぐらの口を縁どりて
春空の果へ消えたる飛行雲
鎌倉の春を巡りて吟行す
あまたなるやぐらを抱き山笑ふ

二〇二四年三月二十三日

みどり児の小さき欠伸桃の花
山門を潜る一步に落椿
山巒を見せは隠し薄霞
白子干混ぜてお日さま匂ふ飯
岩盤のなぞへを埋む著莪の花

毎日句会みのる選・二〇二四年四月二日

なつき 康子
澄子 澄子
もとこ 康子

康子 康子
こすもす 康子
なつき 澄子
かえる 澄子

もとこ 康子
かえる 康子
かえる 康子
山椒 澄子
澄子 澄子
澄子 澄子

ぼんこ 康子
康子 康子
たか子 康子
むべ 澄子
澄子 澄子